

# 留学とグローバル人材そして社交性について

神 余 隆 博

2013年秋季宗教運動の総主題は「“グローバル”な世界に生きる」であるので、それに関して感じたことを述べてみたい。

9月29日の日経新聞ウェブ版は、全国139の大学の学長に行ったアンケートの結果として、半数近くの学長が10年後に海外への留学が3割以上増えると予想していると報じている。グローバル化の時代にあって海外留学は何のためにするのだろうか。これに対する私の答えは、若者がこれまでの自分中心の生活から、人のため、世のためになることを考える成熟した人間になるきっかけをつかむのが留学であるというものである。同年代の世界の若者に触れて日本と世界のためにできることは何かを見出していくこと、地球社会の一員であること、そしてその前に日本人であることを再認識し、自分に課せられた責任がいかに重いか、何が自分に足りないかが分かるようになる機会を与えてくれるのが海外留学である。

今はやりのグローバル人材とは、そのような使命感を自ら掴み取って日本と世界に奉仕しようとする啓発された人のことを言うのであり、言葉やコミュニケーション能力に長けただけの人間を意味するものではない。

正論を吐くのは簡単である。正しいことを主張するのは、少しの勇気があればできる。しかし、正論だけでこの世の中が動いているわけではない。正論を吐くと同時にそれを貫徹させるための何倍もの努力と説得が必要である。それでも説得ができなければ、また別の手を考える、その積み重ねと多くの失敗を経て初めて物事が動くということを、留学の体験の中から掴んでもらいたいと思う。

そしてそのような説得や交渉がうまくできるためには、言語能力と他人との交わりの仕方を若いときから訓練しておく必要がある。本来社交というものは人間が社会的動物として存在し始めた時代から存在していた。あらゆる人間活動の根本にあるのは社交であり、政治も経済も外交も社交の一形態ということになる。社交は、一定のルール（プロトコール）とスタイル（なりふりを構うこと）とを身につける必要があるので、若い時から癖をつけておかなければならない。社交には約束事があり、素養と訓練が必要だ。社交のできない人間は意識の能動性を捨ててしまったつまらない粗野な存在になる。

碩学の山崎正和氏が言うように、社交を重んじる風潮の醸成は価値が多元化する21世紀の国際社会にとって益々重要性を帯びてくるだろう。

関西学院の目指す世界市民もまず、立派な日本人となるところから始まる。眞の勇気と社交性を留学を通じて涵養し、おもいやりと高潔さを身にまとった世界市民に育ってほしい。

（副学長）